

2021 年 4 月 30 日

通貨ニュース

インド：過去最悪の感染拡大状況に～経済成長は大幅下方修正の可能性も～

インドでは変異株の出現によって新型コロナウイルスの新規感染者数が過去最悪のペースで増加している(図表 1)。直近では 1 日当たり約 35 万人程度の新規感染者数が確認されており、累計感染者数は約 1800 万人のうち死者は 20 万人を超えた。昨年秋の感染第 1 波では 1 日当たり約 10 万人ほどであったことを踏まえると、単純計算で約 3 倍以上のスピードで感染が拡大していることとなる。参考までに世界最大の感染者を出した米国でも 1 日当たりの感染者数は最大で 30 万人程度であったこと、インドでは現在も感染抑制の目途が立たないことを勘案すれば状況は更に深刻と言える。

インドはワクチン生産大国である。しかし、今回の感染拡大でワクチン輸出の停止を余儀なくされたばかりか、国内での初回接種率は 10%ほどであるにもかかわらず、自国分のワクチン供給も間に合わない事態に陥っている。加えて感染者の急増に伴う病床不足やサプライチェーンの乱れによって医療物資も枯渇しつつあり、医療崩壊が起きている。かかる状況下、米国など複数の国や機関がインド向けに支援物資の提供を行う方針を示している。

ムンバイやデリーといった大都市圏をはじめ、国内各所では既にロックダウン措置が採られており、経済への影響も懸念される。従前、業種を絞った対応が主であったものの、今回においては工場の閉鎖などの報道も相次いでおり、今後の状況によっては政府・中銀によって大幅な経済成長の下方修正が施されることも考えられる。

このほか、今後の新型コロナウイルス関連の対応によっては、信用格付機関によるインドの格下げが検討される可能性も浮上している。昨年のコロナ禍において、INR 相場はここまで堅調な対内証券投資フローに支えられた面が大きい。先述の通り、今回の感染拡大は第 1 波とは比較にならない程の規模になっており、コロナ禍からの経済の V 字回復を期待していた投資家には嫌気されることは避けられない。

さらに、一部先進国ではワクチン接種の効果が示現しつつある国も出てきている中、昨年は大規模な金融緩和によって、新興国資産が選好される時期もあったが新興国から資本流出することも考えられる。年初からの米金利上昇はあくまでその一例といえよう。

また、新型コロナウイルスのワクチン普及の巧拙は、先進国と新興国での接種格差はもちろん、新興国の間でも差が出てくるとも予想される。図表 2 は、アジア通貨の 4 月の騰落率であるが、INR のみ値を下げる状況となっている。月末の FOMC にて、FRB が金融緩和縮小に慎重な姿勢を見せたことによるドル安の動きが影響した部分もあるが、感染抑制に成果を上げている TWD や KRW が上位にあり、今月感染拡大が進んだ INR や THB が下位にあること、さらに、今月は米金利に調整が入ったにもかかわらず、INR だけ値を下げたとい

市場営業部
マーケット・エコノミスト
堀 堯大
03-3242-7065
takahiro.hori@mizuho-bk.co.jp

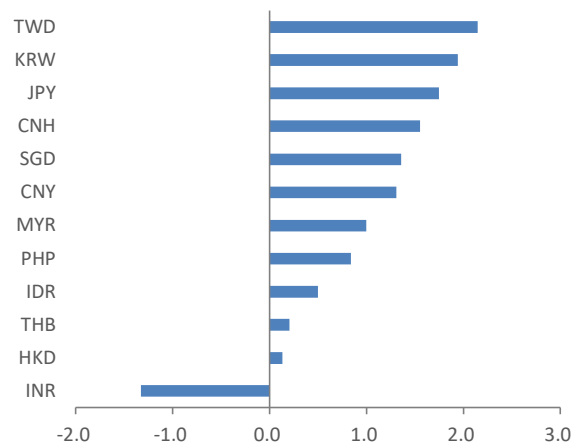
った事実は新型コロナウイルス感染状況と相場動向が無関係でない点を示唆しているのではないだろうか。

図表 1: 新規感染者数と INR 相場の動向



出所: CEIC、ブルームバーグ、みずほ銀行

図表 2: 4 月のアジア通貨騰落率（対ドル、%、29 日まで）



出所: ブルームバーグ、みずほ銀行

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。